２０２２年６月５日　説教『本当の畏れを抱いて』　　高橋克樹牧師

聖書　ヨシュア記１章１～９節、使徒言行録２章１～４３節

イエスの逮捕と十字架刑死に遭遇して仰天した弟子たちは、おそらくガリラヤに逃げ帰っていたはずです。自分たちの故郷であればエルサレムの宗教指導者たちの追求の手も届かず、ローマの官憲の手からも逃れることができるからです。それは自分の身を守る本能的な行為でした。しかし、イエスの十字架の死からの逃亡は彼らに「心の死」をもたらしました。イエスに期待していたのは神から遣わされたメシアとしてのイエスが、ローマの支配とそれに迎合するユダヤ教の宗教指導者たちの理不尽な支配を終わらせ、終末時の救いが自分たちに実現するというものでした。ところが、イエスは何の抵抗もすることなく逮捕され、裁判でもあらがうことなく、十字架上で死んでしまったのです。これはペトロら弟子たちがイエスに賭けていた希望が喪失してしまったことを実感させました。

この希望の喪失は「生きる」ことの意味も失わせました。さらには、イエスをエルサレムの宗教指導者たちの陰謀と、支配者であるローマ帝国による十字架刑死から守ることができなかったことで、自分たちの非力さをとことん思い知らされました。また、イエスを裏切ったことで気力も失せてしまい、今の事態をどう受け止めていいのか自分を見失った状態でした。それでも人間特有の鋭敏な防衛本能を働かせ、ガリラヤに逃げ戻っていたのです。

ところが、ペトロと他の弟子たちは復活したイエスにガリラヤで出会って衝撃を受けます。しかも、復活したイエスはたびたび弟子たちに顕現して、挫折した彼ら弟子たちに神の平安を祈り、その存在を祝福されたのです。イエスを見捨てて逃げたことを叱責することもなく、食事まで一緒にされたのです。ところが、悲嘆のどん底にあったペトロたち弟子たちはガリラヤで復活のイエスに出会ったことで、彼こそが神の御子であることを確信したのです。なぜなら、「神がイエスを復活させた」ことで神の力が証明されたと受け止めたからです。ここで大切なことは、福音書にはイエスが自分の力で復活したとは書いていないことです。神によって復活させられたと受け身形で書かれていることです。ですから、使徒言行録２章３２～３３節で『神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちはその証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました』と、ペトロはユダヤ人や

1

エルサレムの人々に宣言するのです。

この意味は、十字架につけられたイエスは神に呪われた者ではなく、彼こそが神のキリスト（救い主）であることが、復活によって明らかになったということです。そして、ペトロや弟子たちは自分たちが再びエルサレムに戻っていく理由を、聖霊を受けたことで明確に確信します。

もともとガリラヤのベトサイダ出身のペトロは復活したイエスの顕現に遭遇して、逃亡の地のガリラヤから再びエルサレムに上京する決意を固めます。他の弟子たちをエルサレムに導くのも、おそらくペトロのイニシアティブによるものです。それはガリラヤではなくてエルサレムで、イエスが為そうとしていた業を継承すべきだと彼が考えたからです。使徒言行録２章１４節以下でペトロは勇気をもって語り始めますが、その内容はイエスが神から遣わされたメシアであること、また、神がイエスを通して人間を救おうとされていたことでした。

こうしてペトロたちは十字架刑死から５０日後のユダヤ教の暦であるペンテコステに、エルサレムにおいてイエスの復活を告知する宣教を開始し始めたのです。この時すでにペトロや弟子たちは伝道の根拠地をエルサレムに据えていたのです。おそらく、イエスがエルサレムに上京したときには弟子たちの間ではエルサレム移住の決断が為されていたと思われます。結婚していたペトロは家族ぐるみでイエスを支援してきたので、ガリラヤから生活の根拠地をエルサレムに移したのです。マルコ福音書１５章４０～４１節によれば、ガリラヤ時代からイエスの世話をしていた婦人たちがイエスの逮捕と処刑にもかかわらず、エルサレムに踏みとどまることができたのは、根拠地としての家がすでにエルサレムにあったからでしょう。

この意味で、エルサレムでペトロがイエスの復活を核心とした宣教を開始するのは、頓挫したイエスの福音宣教の業を継承したものであったのです。

本日のテキストの１４～３６節においてペトロは、①イエスの復活によって終末時の救済が確実なものとして示されたこと、②しかし、命への導き手であるイエスを殺したことの責任を自覚する必要があること、③いま聴衆が目撃しているペンテコステのさまざまな現象は誰にでもわかるようにと、神による終末の救いが到来した確かなしるしであること～を明確に告知しました。

３７節によると『人々はこれを聞いて大いに心を打たれ』、ペトロたちに『兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか』と問うたのでした。これに対して、ペトロは３８節によれば、悔い改めることを強く勧めています。そして、イエスの名による洗礼を受け、復活したイエスに罪を赦していただくことを

2

勧めます。というのも、イエスを十字架につけた責任は『あなたがたは律法を知らない者たち（＝ローマ）の手を借りて、十字架につけて殺してしまったからです』（２章２３節）と言うように、直接ローマ帝国に加担していなくても、イエスが殺されることを見過ごした者全員に、その責任があるからです。ペンテコステに世界各地から巡礼のために来ていたユダヤ人たちとエルサレムに住む人たちに、罪の自覚を強く勧めるのです（２章１４節）。

それは、やはりペトロが大祭司邸の中庭にいたときの経験が決定的だったのです。ペトロはイエスとの関係を否認したとき、「鶏が二度鳴く前に三度わたしを知らないと言うだろう」と語ったイエスの言葉を思いだして、激しく泣きました。

ペトロがイエスとの関係性を三度も否認することをイエスがあらかじめ知っていたことに、秘められた福音に後から気づいたのです。ペトロが三度イエスを否んだ罪の重大性に気づいたのは、彼が自らの行為を自己反省したからではありません。女中がペトロをイエスの仲間だと指摘したことで彼がイエスを否認する罪を犯し、自分でも気づかなかった自分の「正体」を知ることになったからです。しかも、ペトロは信従の誓い（マルコ福音書１４章２９節、同３１節）を担いきれない自分自身の弱さをイエスがあらかじめ知っていたという事実によって、彼は自分の罪深さに直面させられたのでした。『たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません』（同１４章２９節）と自信たっぷりに宣言し、『たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません』（同３１節）と言い張った言葉の空しさに気づかされたのです。

それはまた、自分のことは自分が承知しているという前提が脆くも崩れ去ったときでもありました。自分で自分のことが何も分かっていなかったという事実に愕然としたのです。ペトロに限らず、私たちは自分の「正体」を知らず、自分の罪の深さにも気づかずに生きているのです。けれども、イエスとの関係性において自分をみつめるとき、ペトロも私たちも主イエス・キリストに知られている本当の自分に出会わされるのです。イエスを否認したときのペトロと同じように、私たちは自分の人生はイエスと何も関係がないことを主張しがちです。聖霊降臨のときに、ペトロが語りかけているエルサレムのユダヤ人たちもそうです。しかし、イエスは自分の罪深さや、自分の正体にも気づかない者のために贖いの死を遂げたのです。だから、『わたしたちはどうしたらよいのですか』との質問に、ペトロはまず悔い改めを勧めるのです（３８節）。

3

悔い改めについて、もう少し考えてみたいと思います。冒頭でイエスが十字架につけられたとき弟子たちは「心の死」を経験したと申しました。それはある生き方を信じて人生を歩んできた人が、その生き方が続けられなくなったときに訪れるものです。たとえば、人生は成功がすべてだと信じて生きている人がいるとします。　守銭奴と陰口をたたかれても、お金のために友だちを捨て、商売相手を裏切り、困っている人を見ても振り向かずに生きてきた。周囲から批判されても自分の生き方に自信を持っていた。しかし、その生き方が大きな挫折で変更を余儀なくされたら、人はどうするのか。長年信じて来た生き方が間違っていたことを認めなくてはならなくなります。けれども、それは自分を守ってきた術（すべ）が無くなってしまうことを意味します。世間の冷たい眼、裏切った友だちの気持ち、そういうことを振り返らざるをえなくなる。自分の心を正当化してきたものがすべて瓦解してしまうからです。

生きる目的を失い、困難に立ち向かう理由も失ってしまいます。人生が意味のない出来事の羅列に見えてしまう。これが「心の死」です。人はなにがしかの制限を心に課して生きています。分かりやすいのは「お金以外は意味がない」という生き方ですが、人それぞれの制約が壊れると、それとセットになっていた「生きる」ことの気力も失わせてしまいます。

それ以外の生き方を選んだことのない人にとって、その生き方を捨てることは死ぬことと同じなのです。だから、人は心の奥底で防衛機制を働かせて必至に旧来の生き方にしがみつくのです。しかし、不思議なことに、その生き方を解除するときが訪れるのです。それが悔い改めのときなのです。悔い改めというのは、なにも自分の罪を悔いるだけのことではありません。もっと深く、生きるうえで課してきた制約という思い込みを捨てることでもあるのです。不思議なことですが、人間は挫折や大きな障害、苦難に出会うと、自らその制約を外そうとするのです。そして、自ら「心の死」を選び、そのことで自分の心を広げて生き直そうとするのです。

象徴的な自分の死という恐怖を乗り越えてまで、心に新しいものをもたらすのは、自分では気づいていないが、主イエス・キリストによって真実知られている自分がいるということです。これまで自分が犯してきた罪の数々を自分でも気づいていない事実に気づく時が悔い改めの時でもあるのです。信念のある生き方によって逆に捨ててきた自分の中のかけがえのないものが、イエス・キリストによって相対化される

4

ことで、新しい自分に生まれ変わることができるのです。

たとえば、お金を第一にする生き方をしてきた人がイエスの名による洗礼を受けることで、イエスが自分の価値観の中で一番になります。すると他の事柄がすべて相対化されます。それまでの自分を支えてきた生き方の根幹が相対化されるので、いったんは苦しい「心の死」を経験しますが、それによって心が広げられるのです。悔い改めと洗礼というのは、そういう新しい生まれ変わりをもたらすものなのです。

この新生の約束は３９節にあるように、『あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、私たちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです』と、主イエスを信じる者すべてにもたらされる福音なのです。そして、ペトロと同じように、主イエスを信じる者が自分でも気づかなかった自分の罪をイエスが知っているがゆえに、その罪を担って下さり、自分で自分を縛っている制約から解き放ってくださるのです。このことを知らされた人々がペトロの説教によってこの日３０００人が洗礼を受けて仲間に加わったのでした。

ただ、４３節で不思議なことが言われています。『すべての人に恐れが生じた』となっています。「すべての人」の原文は「みんなの魂」です。洗礼を受けた後、一人ひとりの魂に「畏れ」の念が生じたのでした。ここでは継続を表わす未完了形が意識的に用いられていることでわかります。

この畏れは使徒言行録でしばしば現れるモチーフで、３章１０節、５章５節、５章１１節にも「恐れ」が未信者、信者の区別なく生じています。新共同訳は恐怖の「恐れ」と訳していますが、畏敬を意味する「畏れ」を抱いたと解釈すべきでしょう。洗礼を受けて、信じて救われることは確実な救いへと招くのですが、そこには終生変わらない「畏れ」があり続ける信仰生活が待っているのです。それは罪におののくということではありません。

ペトロがエルサレムで宣教活動を開始したことは、彼の思いを越えている出来事です。このように、神の導きによって自分の思いを越えた生き方へと召し出されることに対する「畏れ」の気持ちを持ち続けることになるのです。信仰を得ることによって、神の御旨が自分に何をさせるのか、畏れをもってその召しに応える人生が待っているのです。ペンテコステの出来事によって聖霊が与えられたことによって、畏れを抱いて神に対して応答する生活が始まるのです。

5